

にもかかわらず、庭には数匹のボラが銀色の腹を見せて打ち上げられていた。だが、津波の第二波が来ることが心配され、安心はできなかった。こうして結果的には我が家は奇跡的に助かった。

しかし、家の周囲を見回し、私は息を呑んだ。そこは湖と化していて白波が立っている。まだ濁流は収まっておらず、目の前に一台の自動車が流されてきた。そこには人が乗っているのがハッキリ見えた。しかし、そこまでたどり着くすべはない。私はポケットの携帯電話を取り出したが、何のコール音も聞こえてこなかった。なにもできない、どうにもならない。すべてが押し流され、泥と残骸の中に取り込まれ呑み込まれていった。

犠牲になった人々

この日、3月11日は、この地域の中学校では卒業式が行われた。

沿岸に近い中学では、式の後の謝恩の集いの最中に大地震に見舞われた。

会場から急いで家に戻った母と子が家ごと波にのまれて行方不明になった。

ある夫婦は、地方にいる子どもに、とりあえずの無事を報せようと電話をしている最中に家ごと波に呑まれた。数日後、ようやく戻ってきた子どもが両親に会えたのは遺体安置

所だった。私は教え子であるその子どもの話をただ聞くよりなかった。

年長いた母の手を引いての避難中、波に押し流され、手を離してしまった自分を責める婦人。家にいる年寄りを救いに行って共に流されてしまった人。身近で見聞きした悲惨な話しは尽きない。

見えない恐怖におびえる

この惨状に追い打ちをかけて、原発の危機が伝えられた。

連日テレビで報道される政府や東京電力、原子力保安院などの説明は、一向に要領を得ず、不安ばかりが募っており、出口の見えない状況に誰もが翻弄されている。

私の住む相馬市は福島第一原発から約45キロ離れており、現時点では避難勧告は出されておらず、屋内退避地区域からも除外されているが、果たしてそのことを「幸いにして」と言うべきか、困惑している。

実際にはすでに相馬市の児童数の6割が家を離れて市外に避難していると言われる一方、原発により近い浪江町や南相馬市などの避難勧告地域からは、多くの避難民が押し寄せており、学校をはじめ公共施設は満杯状態になっている。

